

# NEWS CAST

August 2009  
No. 98

日本がん疫学研究会

## 「がん予防大会 2009 愛知」を終えて

第 32 回日本がん疫学研究会 会長  
田島和雄  
(愛知県がんセンター研究所)



特別講演の演者：仲津英治氏と

第 32 回日本がん疫学研究会は、第 16 回日本がん予防学会（白井智之会長）と第 10 回日本がん分子疫学研究会（菊地正悟会長）との合同企画による「がん

予防大会 2009 愛知」として、6 月 16～17 日の 2 日間、愛知県がんセンター国際医学交流センターで開催いたしました。今回はアジア諸国や日本全国から約 250 名の参加がありましたが、特に 51 名の学生参加があったことは学会の将来的発展を考えますと大きな成果の一つだったと考えます。がんの予防研究に関連した日本の三学会・研究会の合同開催は、東京、福岡に続いて第 3 回目になりますが、このように「がん予防大会 2009 愛知」を成功裏に開催できましたのも、会員の皆様のご協力とご支援のたまものであり、本大会の運営に当たりました準備委員一同と共に皆様に心より感謝いたしております。

平成 19 年度からスタートした「がん対策基本法」の第三章には基本的施策として三つの大きな柱があり、そのトップにがんの一次・二次予防の推進があげられています。日本がん疫学研究会と日本がん分子疫学研究会の会員は、ヒトがんの危険・防御要因、特に遺伝子型により修飾される環境要因の影響を評価する分子疫学的などがんの一次予防に役立つ研究、わが国のがん対策の基本となり対策の評価にも繋がる地域がん登録研究、二次予防に役立つがん検診の効率化や効果評価の研究などに取り組んでおります。一方、日本がん予防学会の会員はがん予防に関する基礎的な研究を動物実験モデルなども駆使しながら幅広く展開しております。これら三つの学会・研究

会に所属する研究者が「がん予防大会 2009 愛知」に集結し、それぞれの最新情報を提供しながら相互の意見を交換することにより、将来のがん予防に役立つ総合的な情報と知識を分かち合うことは、日本を含むアジア地域におけるヒトがんの予防対策を推進していくための原動力になるものと信じております。

今回は大会の主題を「予防の容易ながん、困難ながん」としましたが、その意義は、慢性感染症や喫煙・飲酒習慣など関連要因がすでに解明されているがんの予防対策に対してもさらに充実した予防実施計画が必要であり、一方では、治療困難ながんに対しては一次予防に力点をおいた戦略が重要になりますから、それぞれのがんの特性に合わせた予防対策を総合的に取り組むための方策を検討することになりました。本大会で予防の困難ながんに関する問題を十分に討議できたとは申しませんが、その第一歩になったことは確かです。

さて、招聘講演では北海道大学教授の浅香正博先生が「ピロリ菌関連胃がんの予防」と題してピロリ菌の除菌による胃がん予防の効果評価について、さらに、国立国際医療センター・肝炎・免疫研究センター長の溝上雅史先生は「日本人に多い肝がんの原因と予防」と題して C 型肝炎ウイルスの防疫対策による肝がん予防の効果評価、などについてこれまでの研究成果をわかりやすく、また情熱を持って講演され、聴衆も有益な情報を得ることができました。

シンポジウムでは、「アジアのがんの特性と予防対策」、「動物発がん予防」、「遺伝子多型と家族性がん」を取り上げ、アジアで増加しつつあるがんの予防対策、動物発がんモデルによる予防実験、遺伝子型による発がん感受性とその対策、などがんの原



因、その予防、評価などに関する幅広い情報提供と活発な討議がなされました。さらに、ワークショップやポスターセッションにおいても最後まで熱心な議論が繰り広げられました。

一方、特別講演「自然に学び、そして地球環境問題に取り組む」をお願いしたエコネット近畿・副理事長の仲津英治氏(前頁写真)が地球環境保全への具体的な取り組みについて紹介されました。仲津氏はJR西日本が東京と博多の間を結ぶ近未来的デザインと特徴的な長い鼻(先頭部)で知られる『500系新幹線電車』を開発されました。その最高時速 300 キロでの静かな走行を可能にした技術は、「野鳥に学び、そして近づくことができた結果」であり、その高速新幹線の開発ポイントは、「自然の中にヒントを求め、自然を見る目を育み、一木一草一鳥一魚の全てを輝ける永遠の教師と認識する」ということで、「医学研究にも自然から学ぶものが多いのではないか？」という問いを私たちに残されました。

来年度は北海道大学の浅香正博会長と札幌医大の森満会長のもと、7月15~16日に「がん予防大会2010札幌」が開催されます。また、今年の11月12~14日には筑波大学の赤座英之会長が日本での開催は三回目となります第20回アジア太平洋がん学会を主催されます。日本がん疫学研究会の会員の方々との再会できるのを楽しみにしております。

最後に、本大会の開催運営に当たりましては名古屋市立大学病理学教室、愛知医科大学公衆衛生学教室、愛知県がんセンター研究所疫学・予防部の多くのスタッフの方々による心強い手助けがありましたこと、本大会の世話人の一人としてここに深謝いたします。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

## 加藤育子先生の近況

富永祐民  
(愛知県がんセンター)

40歳以上の会員なら昔愛知県がんセンター研究所疫学部(現疫学・予防部)で活躍していた加藤育子先生を覚えておられると思いますが、筆者は久しぶりに去る5月9-10日にデトロイトで加藤育子先生に会ってきましたので、加藤先生の近況を報告したいと思います。

加藤育子先生は1982年に藤田保健衛生大学の医学部を卒業し、ただちに愛知県衛生部保健予防課に勤務して、愛知県の地域がん登録事業を担当しました。筆者は当時愛知県の地域がん登録・評価部会長を務めていましたので、地域がん登録の精度向上と活用について相談に乗っていました。私が「地域がん登録のデータはまだ使えないから(登録精度が低すぎるため)、とりあえず愛知県内のがんの部位別死亡率を市町村別に計算して地理分布を調べてみたらどうか」と示唆しました。加藤先生はすぐにこの地図を作製しました。その結果、胃がんやいくつかの部位のがんで地域集積傾向を認めましたので、「この地域集積が偶然のいたずらかどうかかわからないので、統計学的に有意性を検定してみたらどうか」とコメントしました。彼女はしばらくしてから検定結果を持ってきました。なんと大学の大型コンピューターを使ってモンテカルロシミュレーションで検定しているではありませんか!私はこのような高度の統計学を理解して駆使できる医師を県庁の役人にしておくのはもったいないと思い、その後県庁の上司に「地域がん登録のデータ処理は県庁で行うよりも将来は実務を愛知県がんセンターの研究所に移した方がよい。とりあえず、加藤育子先生に愛知県がんセンターの研究所へ移ってもらい、徐々に実務を移管してはどうかと思う」と言い、加藤先生のスカウトに成功しました。しかし、地域がん登録の実務移管は意外に難しく、田島先生が疫学部長、研究所長になってから県当局と難しい交渉を重ねて、田中英夫部長がこの交渉を引き継いで、やっと本年の4月から疫学・予防部に「がん情報研究室」が設置され、名実共に移管が終了しました。

さて、加藤先生は疫学部へ移ってから地域がん登録関係の仕事の他に、環境庁の3府県コホート調査の開始と追跡、1985年から始まった対がん10ヵ年



“ Cancer ” に発表した論文を手に



総合戦略事業による約 9,000 名の病院の胃内視鏡検査受診者コホートのベースライン調査と追跡などを担当し、これらのデータを基に次々に論文を書きました。加藤先生は 1983 年から 1992 年まで愛知県がんセンター研究所の疫学部にて在職し、この 9 年間に原著論文 60 編、書籍・総説 25 編を書いています。加藤先生の発表論文数は多いのですが、ホームランや長打的論文は少なく、イチローのように内野安打を含むヒットを量産しています。加藤先生は研究室の入り口での立ち話で、何かの研究テーマについて「あのデータを使えばこのようなことが解析できるのでないかな」とつぶやくと、1 週間位でコンピューターのプリントアウトを持ってきて結果の概要を説明し、「面白いね」と言うと、さらに 1 週間後に数個の図表を含む論文原稿を作成してしまいました。2, 3 日預かって若干のコメントをすると、論文を修正してしかるべき雑誌に投稿といった具合です。レビューアからのコメントに対しても迅速に、しかしねばり強く対応し、アクセプト率は 9 割を超えていたのではないかと思います。

加藤育子先生は 1992 年に愛知県がんセンターを辞し、Lyon の IARC に移りました。2 年目にがん予防のための介入試験をやっていた Dr. Munoz の部へ移りました。後日 Dr. Munoz が来日した時に「加藤先生はどうしているか」と尋ねましたら、「Ikuko の論文原稿に追い回されている」とうれしい悲鳴をあげていました。加藤先生は IARC でも何編かの論文を書き、1994 年に New York University Medical Center へ移りました。ここではそれまでの多くの業績が評価されていきなり Associate Professor として採用されています。翌年加藤先生は乳がんにかかり手術を受けましたが、すぐに再発し、肺転移も見つかりました。彼女は進行期乳がんにならずに治療を受け、ホルモン療法が効を奏し、何とか天国へ召されずに今日まで生き延びてきました。ここで 5 年間仕事を続け、1999 年に Louisiana State University へ移り、僅か 1 年で現在勤務しているデトロイトの Wayne State University へ移っています。ところが最近新しい肺転移が見つかり、外科医の意見に従ってロベクトミーを受けたとのことでした。加藤先生は「転んでもただで起きず」、SEER のデータを用いて乳がんを含むいくつかの進行がんについて診断からの期間が長いほどその後の予後がよい（生存期間が長い）という論文を Cancer (92:2211-2219, 2001) に発表しています（写真で手に持っている論文）。前

置きが長くなってしまい、加藤先生のアメリカでの業績を紹介できませんでしたが、加藤先生はすでに Wayne State University に 8 年以上在籍し、tenure（終身在職権）の資格を得ています。業績は PubMed でも覗けますが、アメリカでグラントを得ることの困難さや生きがいなどについて、いずれご本人に寄稿してもらった方がよいのではないかと思います。

最後に加藤先生の私生活について簡単に触れますが、加藤先生はデトロイトの GM 本社が入っている 72 階建ての円筒型のビルを囲む高層ビル群のルネッサンスセンターに隣接したプール、ジム付きの、見晴らしのよい、ゆったりしたコンドミニウムに住んでいます。加藤先生は愛知県がんセンターで活躍していた時に比べて表情は明るく、浮き浮きした感じでした。その原因はどうやら 1997 年以来、ハワイ出身の中国系の素敵な男性と一緒に暮らしているからではないかと思いました。私の家内は「人柄のよい癒し系の男性が加藤先生の乳がんの良い影響を与えていると思う」と言っていました。

追記：我々夫婦はデトロイトを後にして昔住んでいたボルチモアを訪問したり、ワシントン DC の近くに住んでいる友人宅に数日間滞在し、旅行の最後に 2, 3 日ニューオーリーズに滞在して本場のニューオーリーズジャズを堪能してきました。新型インフルエンザは日本では大問題になっていましたが、10 日間のアメリカ滞在中に 1 人もマスクをした人を見ませんでしたし、新聞でもほとんど報道されていませんでした。日本へ帰国した際に機内検疫を受けることは想定内でしたが、帰国後 1 週間は外出を自粛しなければいけないことは想定外で、いくつかの講演会や集会に参加できなくなりました。そのため田島先生に講演会の講師のピンチヒッターをお願いしましたが、その後講演を予定していた県でも感染者が発生し、県がすべての公式集会を中止してしまうなど、混乱しました。



## 地域がん登録データを用いた 地域メッシュによる社会疫学研究

放射線影響研究所疫学部副部長  
西 信雄



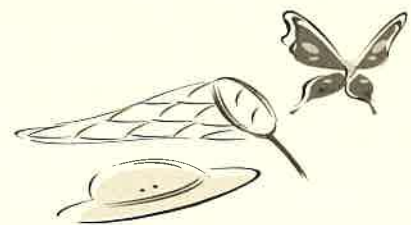
放射線影響研究所疫学部に腫瘍組織登録室長として2004年4月に赴任して以降、がん研究助成金の地域がん登録研究班に分担研究者として加えていただいています。この研究班は、皆様ご存じの通り、藤本伊三郎先生、花井彩先生、大島明先生など大阪府立成人病センター調査部のそうそうたる先生方が主任研究者を務められてきた研究班で、私は主任研究者が津熊秀明先生のとことから、この研究班に参加しています。最初は放射線影響研究所の寿命調査集団のデータをもとに、教育年数とがんの罹患率、死亡率の関連をみるような研究を行って参りましたが、最近では地域メッシュを用いた分析に関心を持って研究に取り組んでいますので、今回はそれを中心にご紹介したいと思います。

地域メッシュを地域がん登録のデータにいち早く取り入れられたのは、神奈川県立がんセンターの岡本直幸先生（本年3月に退職されました）と千葉県がんセンターの三上春夫先生でした。津熊班での先生方のご発表を最初は客観的に聞いておりましたが、私同様に社会疫学に関心をお持ちの岡本先生、三上先生にいつの間にか仲間に入れられてしまいました（いつの間にかというより実は班会議のあと、新大阪駅の地下の飲み屋で酒を酌み交わしたのが決定的だったように思います）。その後2007年10月にパシフィコ横浜で開催された第66回日本癌学会の会場で、岡本先生、三上先生から（株）プラムシックスの寺島さんをご紹介いただき、神奈川県版のシステムをもとに、広島県版のシステムを開発いただくことになりました。

地域がん登録の地域メッシュのシステムを簡単にご紹介すると、集約されたがん罹患データのうち、各腫瘍の部位と罹患者の性、年齢、住所からなるデータベースをインポートして、住所から緯度・経度を割り出して、約1km四方などのメッシュに当てはめていくものです。ただこれだけでは各メッシュの罹患数しかわかりませんので、国勢調査の地域メ

ッシュデータ（各県版が市販されています）をシステムに読み込ませ、メッシュごとの年齢調整罹患率が計算できるようにします。国勢調査には社会経済要因に関する項目も含まれますので、年齢調整罹患率と各社会経済要因との関連もみることができるといいう仕組みです。プラムシックスさんには、広島県版だけでなく、広島市版もメニューで選べるようにするなど、バージョンアップを重ねていただいています。ただ、国勢調査の地域メッシュデータで、2000年版は日本測地系と世界測地系が並存していたのですが、2001年の測量法改正を受けて2005年版は世界測地系のみとなったため、日本測地系で作成していただいていたシステムも変更を余儀なくされました。

2008年度から井岡亜希子先生が地域がん登録班の主任研究者となられてからは、地理疫学ワーキンググループ（WG）として、さらに社会疫学の研究を推進することになりました。立命館大学の中谷友樹先生や大阪府立成人病センターがん予防情報センター（本年4月に調査部から名称変更になったそうです）の伊藤ゆり先生の参加も得て、メンバーも充実してきています。特に中谷先生は地理疫学の第一人者で、わざわざ箱根までWGの合宿形式の会議にお越しいただき講義をしていただいたのは感謝にたえません。中谷先生は日本全国の国勢調査メッシュデータをお持ちのようですので、メッシュ単位のデータをもとに、イギリスのCarstairs Indexのような社会経済要因に関する合成指標を開発いただくか、地域類型を示していただくことができそうです。健康指標のデータは、われわれが提供できるものですので、地理疫学WGでは強力なチームができ上がりそうです。個人的には、がんは循環器疾患ほど社会経済要因による格差が見られにくいと考えていますが、がんの部位ごとの違いなどを見るのもおもしろそうです。研究成果を、がん疫学研究会でご紹介できればと思っています。今後ともよろしく願いいたします。



## 日本がん分子疫学研究会との合併：その経緯

日本がん疫学研究会幹事

日本がん分子疫学研究会会長

浜島信之

本年度の学術集会「がん予防大会 2009 愛知」の折に説明がありましたように、本研究会と日本がん分子疫学研究会との合併についての検討が行われています。私は日本がん疫学研究会の幹事であると同時に、日本がん分子疫学研究会の会長も務めており、その経緯について説明したいと思います。

日本がん分子疫学研究会は 1999 年に北川知行先生を初代会長として発足し、第 1 回の研究会が 2000 年 5 月 15 日に開催されました。当時、疫学研究者の中には生体指標を用いた研究を得意とするものがあり多くなく、一方では多数の人を対象として生体現象を研究することに、疫学以外の日本人研究者の間でも関心が集まり始めた頃でした。日本がん分子疫学研究会の会長は中地敬先生、湯浅保仁先生、浜島へと引き継がれ、本年までに 10 回の研究会が開催されています。この間に、多人数を対象とした生体指標の研究が多く行われ、がん疫学研究の主要な研究分野の 1 つとして定着しました。疫学研究は記述疫学、分析疫学、介入研究に区分されますが、いずれにおいても生体指標を用いることの重要性が認識され、これを取り入れた疫学研究が多く行われるようになりました。

秋葉澄伯先生が主催されました平成 18 年の第 29 回の研究会から、研究会としての性格を同じくする日本がん疫学研究会と日本がん分子疫学研究会が同時開催となり、平成 19 年度からは日本がん予防学会も加わり「がん予防大会」と発展しました。目的を同じくする研究者にとって、他分野の知識や技術が吸収でき、共同研究の機会を得ることができる合同研究発表会は魅力的です。このような活動の中から、会員の重複が多い本研究会と日本がん分子疫学研究会との合併が話題となり、幹事会では平成 18 年には田島和雄先生から合併についての提案が行われました。この提案を受け両研究会において連携協議会が設置されました（本研究会の委員：秋葉先生、菊地先生、田中先生、大島先生、田島先生、日本がん分子疫学研究会の委員：北川先生、中地先生、湯浅先生、梶村先生、浜島）。本研究会では昨年末にアンケ

ート調査を行い、7 人の会員から意見が寄せられ、両研究会の合併についての賛同が得られました。本年 5 月 15 日にはそれぞれの研究会で実施されたアンケート調査結果に基づき連携協議会が開かれ、合併に向けて協議が行われました。その協議の結果が「がん予防大会 2009 愛知」6 月 16 日 13:00-13:30 の両研究会の会員への合同説明会となったわけです。

その合同説明会で、合併の理由は「1. 両研究会が対象とする研究分野は重複するところが大きく、合併すればそれぞれの研究会にとって多彩で有益な情報交換が行われ、がん疫学全体を包含する研究会になる。2. 当然ながら両研究会には会員の重複も多く、合併すれば会員を一元管理することができ、2 つの事務局が作業をするという無駄を省くことができる。」であると説明されました。これまでの両研究会の長所を発展させる工夫として、付則に「本研究会はがんを対象とした予防、医療、実態把握に疫学・分子疫学を応用する幅広い分野を対象とする。例えば、記述疫学、分析疫学、介入研究、がん登録、検診、分子疫学、発生機序、診断分類、発生要因、予防要因、予後要因、がん対策、がん予防、患者 QOL、がん対策、社会システム、およびこれらの分野と関連する研究分野が挙げられる。」と記載することも提案されました。また、合併後の新研究会の名前をきめるために投票など会員の総意を反映する手続きが必要であると連携協議会や幹事会は考えています。今後、両研究会の幹事会での検討を経て、可能であれば来年の総会で合併の可否について決定することになります。なお、ご意見がございましたら日本がん疫学研究会事務局もしくは私にお知らせいただければ幸いです。





**平成21年度  
日本がん疫学研究会幹事会議事録要旨**

日時：2009年6月15日(月) 6:30~8:30 PM  
場所：愛知県がんセンター研究所北館 3F セミナ室  
出席者：森、山口、味木、井上、永田、浜島信之、  
鈴木、菊地、玉腰、田中英夫、松尾、石川、  
津熊、竹下、西、秋葉（以上幹事16名）  
特別参加：田島和雄 事務局：山内  
欠席者：坪野、西野、津金、祖父江、濱島ちさと、  
溝上、岡本、若井、小笹、清水由紀子、  
古野、本荘、田中恵太郎、嶽崎

[議事録要旨]

1. 庶務報告（庶務担当幹事：松尾）
  - 1) 会員数：2009年6月1日現在で会員数は212人、うち海外顧問2人、賛助会員1社であった。1990年以降会員数は減少傾向にある。
  - 2) NEWS CASTの発行：主編集者永田幹事、副編集者田中英夫幹事によりNo.94からNo.97までの4号が発刊された。
  - 3) 会計報告：平成20年度の会計収支報告が行われたが、津金、若井両監事欠席のため両監事の報告書の監査印をもって承認された（総会においては津金監事より監査報告された）。続いて平成22年度予算案についても承認された（総会にて承認）。
2. 役員等の一部改選（代表幹事：秋葉）
  - 1) 特別会員の推薦：任期満了に伴い改選対象の岡本幹事と非改選の古野幹事が推薦された（総会にて承認）。
  - 2) 幹事の改選：2009年6月30日付けで任期満了となる19名と非改選の古野幹事（特別会員への推薦）の計20名のうち、古野、岡本両幹事の特別会員への推薦、清水由紀子幹事の事前辞退申入れがあり、話合いの結果、改選対象の残り17名は全員再任され、新たに3名（伊藤秀美、郡山千早、岩崎 基）が新幹事として選出された（総会にて承認）。
  - 3) 監事の依嘱：任期満了となった津金監事に代わり井上幹事が推薦され依嘱された（総会にて承認）。
  - 4) NEWS CAST 編集者：永田幹事の任期が終了し、新編集者として味木幹事が推薦され、承認された（総会にて承認）。
3. 次々年度の日本がん疫学研究会の会長選出：（代表幹事：秋葉）  
次々年度の研究会（平成23年度に開催予定の第34回）の会長として津熊秀明幹事が推薦され承認されたが、日本がん分子疫学研究会との合併等の問題も含め、開催についての時期、場所および他の学会・研究会と合同開催等は現時点では未定である。
4. 次年度の日本がん疫学研究会の開催：（次期会長：森 満幹事）  
第33回の学術総会（第11回日本がん分子疫学研究会の会長も兼任）は第17回日本がん予防学会（北海道大学：浅香正博会長）と3会合同で平成22年7月15日(木)と16日(金)に北海道大学学術交流会館にて開催予定。
5. その他  
日本がん分子疫学研究会との合併について議論された。秋葉代表幹事から簡単な経緯説明が行われた後、田中英夫幹事から、両研究会連携協議会の第一回会合（平成21年5月15日開催）での検討内容が説明された。その後、浜島幹事（日本がん分子疫学研究会会長）から、合併後の研究会の概要を具体的に議論するために作成された会則の試案が示され、これを基に合併に関して議論が行われた。  
会則試案の付則に示された研究分野の記載に、修正・追加意見が出され、修正後の同規約案を総会に提出することとなった。  
合併後の会の名称として、連携協議会の第一回会合では日本がん統合疫学研究会や日本がん連合疫学研究会などが提案されたとの報告があった。幹事会では、その他の案として、日本がん疫学・分子疫学研究会なども選考の対象とすべきであるとの意見が出された。  
合併後は、両研究会の幹事が合併した研究会の幹事となるの方針が示されたが、特に異論はでなかった。また、幹事の定年制、即ち、任期中に60歳となる幹事は再任を辞退するとの内規に関しても議論が行われた。日本がん分子疫学研究会には、60歳以上の幹事がおられるが、合併後も留任・再任を可とすることに異論は出なかった。しかし、合併後、新たな幹事を任用する場合、満60歳未満の会員を対象とすることとしたいとの意見が多数を占めた。今後、その他の懸案事項に関しても検討を加えつつ、合併の方向で検討を進

めることが承認された。具体的には、合併に関する議論をニュースキャストなどで紹介し、一般会員からの意見の把握した後で、幹事会・連携協議会で、細部を詰め、その上で平成 22 年度の総会

で合併の可否について結論を得ることとなる。以上の基本的な方針と会則草案を総会に諮ることが承認された（総会にて承認）。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

日本がん疫学研究会平成 20 年度収支報告書

日本がん疫学研究会平成 21 年度予算

	平成 20 年度 予算案	平成 20 年度 決算
収入	<u>1,610,769</u>	<u>1,617,409</u>
1) 前年度繰越金	540,369	540,369
2) 年会費 (5,000 円×延 200 名)	1,000,000	1,005,000
(50,000 円×1 団体)	50,000	50,000
(3,000 円× )	—	6,000
3) 利息	400	1,120
4) 幹事会自己負担金	20,000	13,000
5) 通信予備費残額	—	440
6) その他	—	1,480
支出	<u>1,610,769</u>	<u>1,617,409</u>
1) 会議費(幹事会)	30,000	15,100
2) 次年度研究会総会開催補助金	400,000	400,000
3) 会員名簿作成	80,000	94,760
4) 印刷代(NEWS CAST 4 回発行等)	130,000	139,860
5) 通信連絡費(郵便切手代等)	200,000	154,080
6) 振込手数料(含郵便振替料金)	25,000	18,915
7) 旅費(庶務)	70,000	55,560
8) 謝金(月額 10,000 円×12 ヶ月)	120,000	120,000
9) 諸雑費(コピー代、事務用品)	20,000	6,293
10) 次年度繰越金	535,769	612,841

	平成 21 年度 予算
収入	<u>1,613,841</u>
1) 前年度繰越金	612,841
2) 年会費 (5,000 円×延 190 名)	950,000
(50,000 円×1 団体)	50,000
3) 利息	1,000
支出	<u>1,613,841</u>
1) 会議費(幹事会)	30,000
2) 次年度研究会総会開催補助金	400,000
3) 印刷代(NEWS CAST 4 回発行等)	130,000
4) 通信連絡費(郵便切手代等)	150,000
5) 振込手数料(含郵便振替料金)	25,000
6) 旅費(庶務)	1,500
7) 謝金(月額 10,000 円×12 ヶ月)	120,000
8) 諸雑費(コピー代、事務用品)	20,000
9) 次年度繰越金	737,341

収入

- 2) 年会費：団体；賛助会員の年会費  
H17 年度：2 件；H18 年度：5 件；H19 年度：22 件；  
H20 年度：172 件(賛助会員 1 件含む)；H21 年度：3 件
- 4) 幹事会の食事代一部各自負担
- 6) その他：NEWS CAST 郵送の際 “がん予防大会 2009 愛知” の案内印刷物同封による郵送料増額分の返金

支出

- 3) 会員名簿 400 部作成(名簿作成に関連の印刷、郵送料)
- 4) 印刷代：NEWS CAST 年 4 回 各 700 部、封筒
- 5) NEWS CAST 年 4 回：116,200 円、通信連絡予備費：21,000 円他
- 7) 事務局より研究会総会参加への旅費(福岡 2 泊 3 日)
- 8) 幹事会・研究会、会計監査等の準備、NEWS CAST 発送、入・退会、年会費等の事務
- 9) 事務局使用の TEL・FAX・コピー代、コピー用紙・タックラベル用紙・事務用品代等の代替

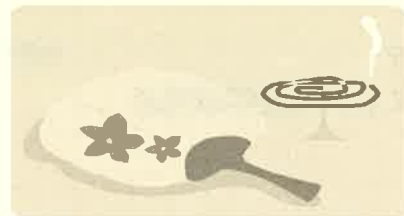
収入

- 2) 年会費：団体；賛助会員の年会費

支出

- 3) 印刷代：NEWS CAST 年 4 回各 700 部、封筒等
- 4) NEWS CAST 年 4 回郵送代等
- 6) 事務局より研究会総会参加への旅費(名古屋市内 2 日間)
- 7) 幹事会・研究会、会計監査等の準備、NEWS CAST 発送、入・退会、年会費等の事務
- 8) TEL・FAX・コピー代、コピー用紙・タックラベル用紙・事務用品代等

\*収入：例年幹事会の出席者よりお弁当代として一部自己負担していただいていたが、年会費値上げ後の繰越金の増額に伴い平成 21 年度より予算に計上しない。(総会で承認済)



# 第20回アジア太平洋癌学会



20th Asia Pacific Cancer Conference  
November 12-14, 2009

2009年11月12日(木)~14日(土)  
会場: つくば国際会議場(エポカルつくば)  
会長: 赤座 英之(筑波大学)  
【演題登録】  
2009年8月31日(月)正午まで  
【事前登録】  
2009年10月15日(木)正午まで

Cancer Control - Setting the Focus on Unique Asian Pacific Contributions  
http://www2.convention.jp/20th-apcc/ E-MAIL: 20th-apcc@convention.jp

## 第68回日本癌学会学術総会のご案内

## ★ 編集後記 ★

大会テーマ	科学の躍動をがん克服へ
学術会長	廣橋 説雄 (国立がんセンター)
開催期間	2009年10月1日(木)~3日(土)
開催場所	パシフィコ横浜 (会議センター、展示ホールA・B) 〒220-0012 横浜市西区みなとみらい1-1-1
事務局	第68回日本癌学会学術総会事務局 (プランニングオフィス アクセスブレイン内) TEL:03-3839-5032 FAX:03-3839-5035 E-mail:jca2009@accessbrain.co.jp

本号から編集委員2年目の主担となりました。今回も読み応えのある原稿を頂戴し、投稿していただきました会員の先生に厚く御礼申し上げます。富永先生が御紹介下さった加藤育子先生は、1990年頃に地域がん登録の研究班で一緒にさせていただいたことがあり、とても懐かしく、また、その生き方に勇気をもらいました。(田中)

本号から編集を担当する国立がんセンターの味木です。田中先生が全ての段取りを進めて下さり、読み応えのある原稿を逸早く拝見できる特典を享受しました。加藤育子先生の「9年間で原著論文60編」には遠く及ばないまでも、実務に追われるばかりでなく、学術的な成果もきちんと上げていかなければならないなど、改めて痛感しました。(味木)



発行

日本がん疫学研究会

事務局 〒464-8681 名古屋市千種区鹿子殿1-1

愛知県がんセンター研究所 疫学・予防部 内

TEL: 052-762-6111 (内線 7316)

FAX: 052-763-5233

編集責任者

田中 英夫

味木 和喜子